

所 報

No. 28

佐賀県教育センター

佐賀県佐賀郡大和町川上

TEL 09526-2-5211

特集号 基礎学力向上対策

もくじ

○充実感の濃い授業をつくる	1
○重要語句に着目しての読み (小学校国語)	2~3
○中学年の地域 習の進め方 (小学校社会)	3~4
○ゆとりがあり, 充実の授業 (中学校数学)	5~6
○作業的な学習の進め方 (中学校社会)	6~7
○英語指導の重点 (中学校英語)	8~9
○朗読の指導を授業に組み込もう (高校国語)	9~10
○評価を生かした学習指導 (教育評価)	11
○意欲的学習をささえる親や教師のはたらきかけ (教育相談)	12

充実感の濃い授業をつくる

佐賀県教育センター研修二課長 庄 島 奎 介



「わかる授業」ということが、しきりに問題にされているところであるが、まことに結構なことである。「いま、わかる授業とは」これはしばらくおくとしても、当然のことながら「授業とは、ひとり一人の子どもがわかっていくということ、丹念に積みあげていく連続的な営みである」といえよう。もっと端的な言い方をすれば、授業は「わからせる」「わかっていく」ことの仕組み以外の何ものでもないのである。

このわかる授業のために切実な課題がいろいろ考えられるが、満足感、充実感の濃い授業をもたらす一つの課題として、「できた、わかった」という子どもの充実感を、時間の都合で薄めてしまったり「わかったと思わせる」ところで打ち切ってしまうという現実を、まず改めなければならないということをおきたい。

45分というわくが固定的であるという観念が先行して、折角燃えてきた子どもの思考を中断せざるを得なくなったり、一連の流れの中でやるべき定着のための練習や作業を、家庭学習に任せてしまったり、具体物操作を通して習得させる過程を計画しなかったり、目には見えていても、誤答を正したりつまづきを助けたりする時間をはしょってしまったり—など、など。45分を動かせないものとする固定観念のなせる罪は大きい。

授業では、もちろん子どもが中心にすえられなければならない。授業の計画にしても実践にしても、まず、学習者そのものが見つめられ、二番目に教材内容が吟味され、そのうえで時間をどうするかという、つまり、子ども、教材、教師に応じて授業の時間の長短がある。という「わかる授業」が作られなければならない。

子どもの実態や教材内容から授業の時間を見直して、「わかる」ことのために必要であり、有効適切と考えた場合には、90分授業も、60分授業も、あるいは30分授業も行われていいのである。

そのためには、学級担任や教科担任の裁量によってそうした授業が可能な校時程や週時程が、学校として用意されていなければならない。

子どもの集中状態や疲労度を中心にしたところの「わかる授業」への試みとして、最近、モジュール制や90分授業など、意欲的に研究的に行われている。—もちろん、45分の一単位時間を否定するものではない。あくまでもそれを原則としての発想である。—充実とは、子どもたちがほんとうによくわかった、「身につまされてよくわかった」というようにもっていくことであるという。子どもたちに充実感の濃い授業を、と念じてやまない。

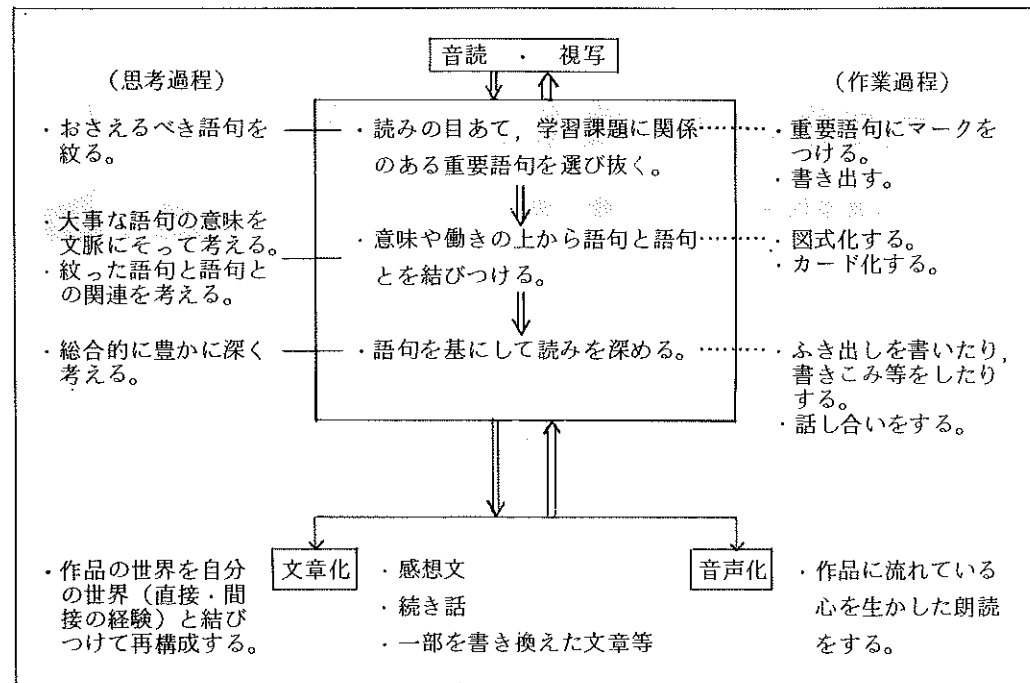
----- 小学校国語科 -----

重要語句に着目しての読み

文学教材の読みの指導において、登場人物の心情の変化を探っていく場合、先ず、その人物の言動をおさえさせてみる。具体的には、言動から気持のわかる語句や文にサイドラインを引かせたり、書き出させたり作業を仕組むなどのステップをふむことである。

して思考を深めていく上での、具体的な方法や手順を明確に児童に提示する必要がある。

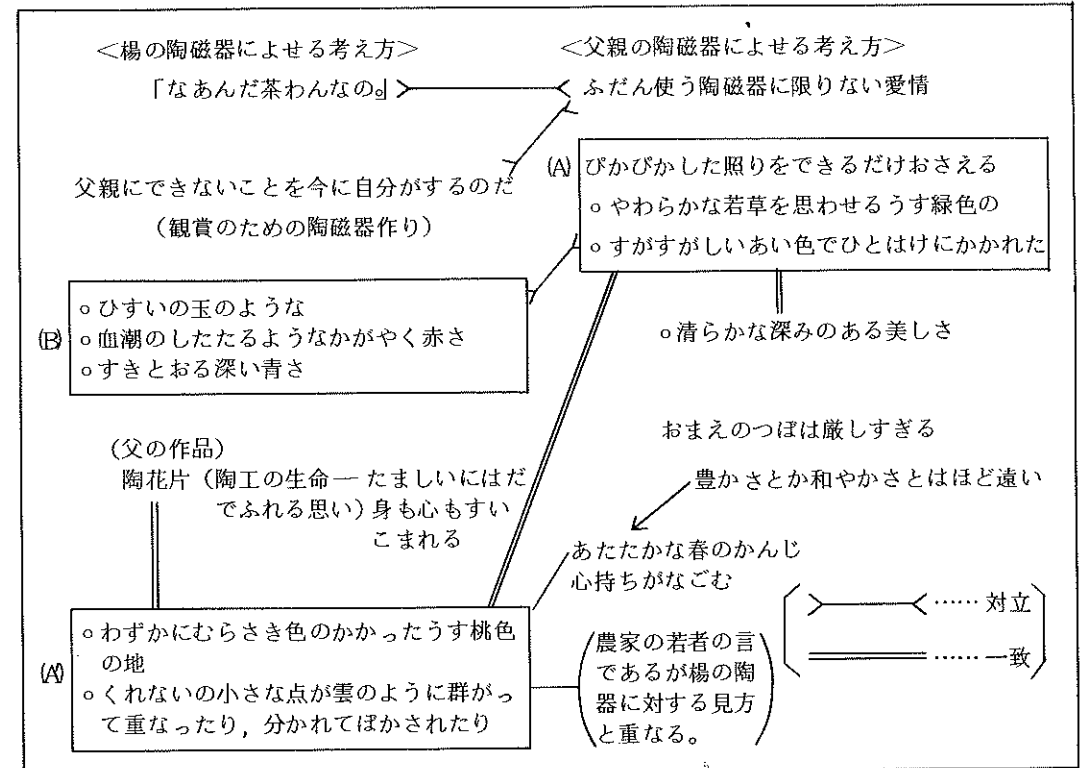
そこで、児童の読みの基礎的な力をつける上で重要語句に着目した学習過程を大切にしたいと考える。次に示す図は、重要語句の選択・結合を核にしての読みから表現につなげていく指導過程である。



重要語句に着目しての読みの指導の一例として、桃花片(東書6上)を取り上げてみたい。この作品の特色の一つである色彩表現が豊かであることに着目して学習を展開させてみよう。学習の後半に入り主題に迫る学習課題として、「楊の求めていた陶磁器は、どんなものであったのだろう」として見る。学習過程としては、楊の心の成長過程すなわち心情の変化を背景に芸術観をまとめることになる。楊に焦点を当てながらも、父親の芸術観と比較対照させていくことが大切になってくる。授業の流れとして

- は、
- (1) 父親と楊との作品に関する色彩表現を抜き出す。(重要語句を絞る。)
 - (2) 抜き出した語句を比較検討する。(語句と語句との関連を考える。)
 - (3) 結びつけた語句を手がかりとして楊の求めた芸術観を考える。(文脈に沿って思考を深める。)といった手順をふんでいかなければ、色彩表現を核にしなが、会話や行動に関する表現を重ね結びつけていくことによって豊かな読みをめざしていきたい。

次に、重要語句を中心にすえての語句と語句との結びつきの概略を図示してみよう。



父親に関しての色彩描写は(A)のように色あいをぐっとおさえた中間的である。一方、楊のそれは、(B)のようにはなやかに原色的である。しかし、楊の求めた最終的なものは(A)の表現にみられるように父親に関する(A)と一致するのである。このように色彩表現に視点をあてただけで

も楊の陶磁器に対する見方の変化はわかるのである。作品の特徴からある視点を持ち、重要語句を核として生き生きとことばに対応しての読みを積み重ねていきたい。そうすることが読みの基礎力を養うことの一環になることである。 (所員 平山 幸彦)

----- 小学校社会科 -----

中学年の地域学習の進め方

本年度、当教育センターでは、小学校社会科の講座を三講座実施した。中学年の講座の際、「3、4年の社会科を指導する時、教科書の他に副読本があるし、そのものずばりの指導書がないので、どんなに指導してよいか、本当に困っている」ということを聞いた。そこで、「人々のくらしと県のはたらき」を参考に、中学年の地域学習の進め方について考えたい。

1. 中心教材の選択
「人々のくらしと県のはたらき」では、公民館や公園などの公共施設ができるまでの経過を調べることによって、地方自治体の計画的な働きを気づかせ、それらの施設と人々の生活との関係について考えさせることをねらっている。子ども達は、教材として教科書や副読本「わたしたちの佐賀県」を持っている。また、市町

村の教育委員会には、「佐賀県総合運動場—人々のくらしと県のはたらき—」のVTRのテープがある。

このVTRは「佐賀県の総合運動場がどのようにして作られたか」を具体的な映像と解説で子ども達にわかりやすく理解させるために作られた教材で、内容は次の3パートから成立している。

- 第1パート 子ども達と県総合運動場
- 第2パート 県総合運動場の建設と管理（場長さんとのインタビュー）
- 第3パート 県総合運動場の利用

この単元の指導の際、特に副読本やVTRの内容を十分に理解し、それぞれの特徴を生かして望ましい展開をするべきだろう。次の表は、この単元の教材選択の目安である。

教科書	VTRがある学校		VTRがない学校
	A	B	
教科書	△	△	○
副読本（県版）	◎	○	◎
VTR	○	◎	○

凡例 ◎中心教材 ○副教材 △参考教材

各教材の特性を考慮すると次のような学習指導の展開例が考えられる。

- (1) Aタイプ……副読本の内容をこの単元の指導の根底に置いて学習を進め、VTRの教材で学習内容を豊かにするタイプ
- (2) Bタイプ……この単元の導入として、VTRの一部を見せて問題意識を持たせる。そのあとで、解答を予想させ再びVTRを見せて検証させる方法がある。検証した結果を副読本で確かめるタイプ
- (3) VTRを利用しないタイプ……学習の進め方を教科書で学び、副読本を中心教材として学習を進めるタイプ

2 指導上の工夫

身近な市町村や県を対象に指導する中学年の地域学習を展開する際、次のようなことを心がけると指導の効果があがると考えられる。

- (1) 単元全体として 子ども達は、学習の内容に自分達のような

子どもが登場することによって、学習への興味や関心が一段と高くなる傾向を持っている。従って、「人々のくらしと県のはたらき」の指導の際、県のはたらきを子どもの生活のもとに出来るだけ具体的に取り扱うことが大切である。

(2) 導入の段階

導入の段階で総合運動場と子どもを結びつけるには、次のような方法が考えられる。その一つは、「夏、君たちが一番したい運動は何ですか」という問いかけから「水泳」に注目させ、その上で、「小さな子どもから大人まで泳げる所があるけど、どこか知っている？」と追求する方法がある。

また、学童水泳大会の録音を子ども達に聞かせて、「この録音は、どこで、何があったときのものと思う」から総合運動場に結びつける方法がある。

もう一つは、この単元の指導を10月頃に行うので、毎年行われる国体に注目して、佐賀県選手団の入場行進の写真（新聞）を見せたあと「この写真は、何の場面でしょう。実はこの写真のようなことが佐賀であったんだよ」といって総合運動場に結びつける方法も考えられる。

(3) 展開の段階

この段階で、最も心がけたいことは、自分達と何らかの意味で結びつきがある総合運動場のことについて、子ども自身が、意欲的に追求するように指導・援助してやることであり、そのための教材としてVTRや副読本を効果的に取り扱いたい。

(4) まとめの段階

まとめの段階では、それまで学習（指導）してきた事実をもとに、「県内の公共施設は、佐賀県（県庁）が、県議会の検討を受けて、県民の生活の維持、向上のために建設・運営している」ということをはっきりと理解させることが特に大事である。

（所員 角田 研三）

----- 中学校数学科 -----

ゆとりがあり、充実した授業

今日、「ゆとりのある充実した学校生活」が大きくクローズアップされているが、数学授業をゆとりのある充実したものにするにはどうしたらよいかについて考えてみたい。

授業を、ゆとりと充実のあるものにするための条件としていろいろあると思うが、基本的にふまえておくべきこととして、最少限、次のことがらが考えられよう。①基礎的・基本的事項の精選。②指導目標の明確化と焦点化。③前提条件（レディネス）の整備。④生徒の学習活動中心の授業。⑤生徒自身の学習目標の主體的把握。⑥生徒自らが数学をつくりあげていくように仕向ける指導のくふう。これらは、みな、当然過ぎる程当然なことであろうが、その実践となるとそれ相当の研究と努力が必要である。そこで今回は、当センターの研修講座で行った研究授業を具体例として、上記の条件をふまえた授業について述べてみたい。

<具体例> ・第1学年（啓林館教科書）

・章…… 6 平面図形（12時間）

・節…… 1 多角形（3時間）

・節の指導内容と時間配当

1校時

(1)単元のとびら（20分） (2)直線、線分の意味（5分） (3)三角形の辺、角の表し方（5分） (4)三角形の作図練習（20分）

2校時（本時）

(1)三角形がきまる条件（50分）

3校時

(1)多角形をかくには三角形をかくことが基本になること（30分） (2) 本節の練習（20分）

以上のように、この節の中核を「三角形がきまる条件」においた計画にする。1校時の(2)、(3)は、以後の学習でもいたるところで出てくるので、その都度留意して指導すれば、形成可能と考えてよい。(4)三角形の作図練習は、2校時

（本時）の重点を、三角形が「とりにきまる」ことの意味理解におくため、作図能力が十分でないという実態をふまえ、前提条件を整えておいて、作図時間を能率的にするためである。

本時の授業

目標…三角形が1とりにきまる条件について理解させる。

指導の視点

- ・小学校の単なる復習に終らないようにする。
- ・「1とりにきまる」ということの意味理解に重点をおく。
- ・生徒の話し合い活動、操作活動を中心にした授業にする。

展開

- 学習目標の確認……「みんなが書いた（或いは誰が書いても）三角形が、形も大きさもまったく同じになるような三角形をかくには、3つの辺の長さや、3つの角の大きさのうち、最少どれだけをきめたらいいか調べてみよう」
- 話し合い活動……グループで、予想されるいろいろな方法について話し合い、まとめる。
- まとめの発表……話し合いでまとめたことを発表し、調べる方法と手順をきめる。

予想される方法

- (1) 3辺
- (2) 2辺、1角
 - (イ) 1角が2辺の間の場合
 - (ロ) 1角が2辺の間の角でない場合
- (3) 1辺、2角
 - (イ) 2角を1辺の両端と定めた場合
 - (ロ) 2角を特に1辺の両端と定めない場合
- (4) 3角

（教師は、あらかじめ広用紙に三角形を10個位書いたものを、黒板に掲示しておき、辺や角に印をつけて発表させ、全員で検討し易くする。）
○作図……各々の場合について、辺の長さや角の大きさをきめて作図する。各自作図したもの

をグループで見せ合い、同じ三角形になる場合とそうでない場合を確認し、「1とおりにきまる」ということの意味をたしかなものにする。
 ((2)の(ロ)、(3)の(ロ)、(4)は、個人に発表させ、1とおりにきまらないことの理解を十分にする。
 ○まとめ……三角形が1とおりにきまる条件についてまとめる。
 ○評価(ポストテスト)
 以上、授業展開の概略を述べたが、他にも指導の方法はあるだろうし、これは1方法である。「与える授業ではなく、生徒自らが求める授

業」とか、「学び方を学ぶ授業」とか、いろいろ言われるが、それを充たす授業の実践は、たやすいことではない。与え、教え、そしてドリルというパターンの方が、教材消化のためには能率的なように思えるかも知れない。しかし、真に生徒の基礎学力を高め、数学的な考え方や処理能力を育成するためには、生徒自らが主体的に活動するような授業にする必要がある。「ゆとりと充実の授業」というのは、つまるところは、それを充たす授業にしようということであろうと思う。(所員 小副川 重孝)

----- 中学校社会科 -----

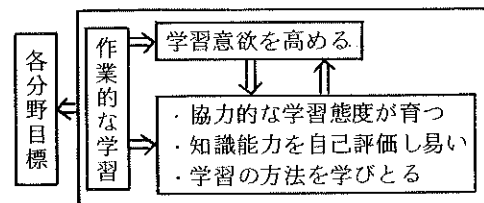
作業的な学習の進め方

1. はじめに

今回の学習指導要領の改訂で、「第3指導計画の作成と各分野にわたる内容の取扱い」の3では、3分野の目標をうけて、「指導の全般にわたって、地図や年表を読みかつ作成すること、新聞、読み物、統計その他の資料に親しみかつ活用すること、観察及び調査したことを報告書にまとめるなど作業的な学習を十分取り入れる必要がある」と示している。ここでは、資料の活用とともに作業的な学習の導入を強調している点に留意し考察をしてみたい。

2. 作業的な学習の利点

作業的な学習は、単なる知識中心の学習に陥ることをできるだけ防ぎ、自ら考え、正しく判断できる力を育成する方法として、取りあげられたものである。作業的な学習を綿密な計画のもとに進めることで、生徒の学習意欲や社会科への関心は高まり、好ましい学習態度の形成に効果的であると考えられる。作業的な学習と学習態度の形成との関係を図示すると次のようになる。



3. 作業的な学習の例

①地理的分野

- 報告文「〇〇〇国だより」 単元の終りに「〇〇〇国だより」として、日本との関連を重視させながら報告文にまとめさせ、各国の特色をつかませる。
- 統計資料の図化 —— 地域の特色を把握させるために、人口密度と工業の発達、耕地面積と米の収量などを資料として、統計地図や表を作成させる。

②歴史的分野

- 歴史年表の作成 —— 単元のまとめとして、歴史年表を作成させ、各事象の因果関係や時代的把握を正確なものにする。(総合的な年表や事象別の年表)
- 歴史新聞の作成 —— 単元の導入やまとめに、当時の人物、政治・経済・社会・文化等の事象などを記事とした歴史新聞を作成させる。こうして形成された人物イメージや時代イメージは先入観となってかなり永続するので、時代の特色の理解に効果的である。
- 地歴統合単元の野外観察と報告文の作成。

③公民的分野

- 新聞切り抜きなどを使った新聞づくり —— 不景気、公害、国民の福祉などのテーマで新聞切り抜きを使って、新聞づくりをさせ、興味

関心の低い単元への意欲を高める。

- 調査活動による報告文の作成 —— 祖父母からの聞きとりによって、はじめて婦人に参政権が与えられ選挙した時の気持や選挙の様子などを報告文にまとめる活動によって、民主主義の発達(選挙権の拡大)を身近なものとしてとらえさせる。
- 各官庁、事務所、農協などから資料を収集して、報告文を作成する。

4. 作業的な学習の展開

—— 歴史新聞作成の一例 ——

①ねらい

歴史新聞の作成によって人物イメージ、時代イメージを形成し、時代の特色を理解させる。

②指導計画

⑦時間のとり方

作業的な学習をとり入れた場合、時間不足を生じるので、その単元等の教材を精選して、時間的なゆとりを生み出し、内容やねらいによって、単元の導入、まとめ等に取り入れる。

⑧教師の指導のあり方

生徒の自発性、主体性が強調されるあまり、

作業そのものを生徒に放任しがちである。各作業過程での教師の細かな指導が計画されなければならない。

学習のねらいによって、作業的な学習の内容を決めることが大切である。

③歴史新聞作成の留意事項

<内容面>

- ある時代の人物や事象(政治・経済・社会・文化等)などから、具体的テーマを決めさせる。
- 資料を集めさせる場合、同時代のヨーロッパやアジアでの主なできごと等も記事として、日本と世界を対比させるなどの配慮が必要である。
- 当時の人になりきっての内容と現代の目からみたその当時の事象の評価(論説的なもの)を入れて作成させる。
- 文章だけでなく、絵、地図、図表なども入れて作成させる。

<方法面>

- 6~7人程度の班学習で、共同作業として行い、相互に話し合い、協力させる。

(所員 原田 治幸)

----- 中学校英語科 -----

英語指導の重点

去る9月28日、29日の両日開かれた当センターの「中学校英語科(指導法)講座」に参加された先生方によると、今年度は特に

- ① 学習習慣がつかない
- ② 英語学習への意欲が出ない
- ③ 学力差がひどくなった
- ④ 書く力がつかない

等の現象が現われているということである。これは授業時数削減によるマイナス面として指摘されたもので、各学校では担当の先生方が少ない授業時数の中でいかにして学習効果をあげるかについて、いろいろ研究・努力されているにもかかわらず上述のような大きな問題が生じていることは、週3時間体制下における英語指導のあり方について改めて検討してみる必要があ

ることを意味していると言えよう。

重点化

1. 音声重視

英語学習の初歩の段階である中学時代にしなければならない(中学時代にしかできない)ことの一つに音声指導がある。この音声指導は高校・大学になってからでは遅すぎる。習慣になった悪い癖は矯正できないと言われる。中学校でも特に1年生の段階で英語の基本的な音声組織に慣れさせなければいけない。特に日本語にないθ, ð, f, Vなどを含めた基本的な音素はもちろんであるが、英語独特のリズムとイントネーションを体得させる必要がある。広島大学の垣田直己教授は29日の講座の中で、「中学校における英語指導において重点化をめざす

とすれば『音声重視』以外には考えられない。『音声重視』は『英語重視』そして『英語重視』は『表現重視』につながる」として音声指導の重要性を説かれた。

英語はわが国においては日常使われる言葉ではないし、たまに接する英語も文字によるものが多い等の理由もあってか、音声よりも文字にたよる傾向があるようである。場面設定やコミュニケーションに必要なならば、教科書に出る単語や構文にこだわらず、多くの英語を使いたい。そしてやさしい英語をもっと多く聞かせることが必要である。一文一文を生徒が完全に理解することを期待しては英語は聞かせられない。1回目はわからなくても、2回、3回と聞かせるうちに生徒はわかってくるだろう。あるいはわかったような気になるだろう。

そのようにわかったような気にさせることが大事だと思う。

2. 1年生重視

昭和55年度の当センターの英語学習に対する好き・嫌い調査(佐賀県教育センター紀要第5集参照)によると、1年終了時に33%が好きで、29%が嫌いの気持を持ち、2年1学期までに約半数(49.7%)の生徒が英語学習を好きではなくなっている。このことを考えると、1年時にいかにわかりやすく指導するかが生徒の英語学習に対する意欲的な取り組みを支えるものであるかがわかる。(英語学習が嫌いになったもっとも大きな理由は授業が「わからない」ということである。)

学年が進むにつれて、学力差がひどくなっている現状をみると、学力差の少ない1年時の指導こそ最も重要であり、1年時に英語学習における望ましい学習習慣をつけておくべきである。

佐賀県で使われている東京書籍のNew Horizon教科書で文部省指定の必修語490語

について調べてみると、その56%にあたる272語が1年生教科書に出ており(2年生教科書では31%の154語、3年生では14%にあたる64語)、少なくとも必修語はプロダクションの域にまで到達させる必要があるとすれば、1年生の学習内容がいかに重要なものであるかがわかる。

3. 指導の重点

1年生 文型、語い、音声(リズムとイントネーション)、学習習慣

2年生 基本3時制(現在、過去、未来)、助動詞、不定詞、動名詞

3年生 後置修飾

言語材料については、各学年において上述のことに重点をおき、その上に概要、要点把握をめざす読解指導をするようにしたい。

繰り返し

英語学習において、繰り返しが重要であることは自明のことであるが、教科書における言語材料の出現状況を見ると、濃縮された内容であることがはっきりする。復習のための年間計画を立てて、計画的に指導していく中で定着を図っていくような配慮をすることが必要である。

昭和56年度New Horizon、における言語材料の出現回数(例)

	1年	2年	3年	計
How many ~ ?	4			4(13)
Which ~ A or B ?		1		1(7)
主語としての動名詞		1		1(5)
What ~ !		2		2(3)
How ~ !		1		1(9)
付加疑問			1	1(8)
不定詞 (「~するために」)		11	11	22(3)
as ~ as		3	1	4(1)

()内は55年度教科書の場合 (所員 力武 晃)

----- 高校国語科 -----

朗読の指導を授業に組み込もう

はじめに

来年度から実施される「新学習指導要領」の目指している。国語科教育の方向は、

- (1) 言語の教育としての立場の明確化

- (2) 言語表現力の重視
- (3) 言語事項の系統的指導
- (4) 表現・理解の二領域の意義の徹底にあるとよい。つまり、国語科の位置

立場・性格が「言語の教育」であることを強く打ち出していることである。その中でも、「国語I」の具体的な指導内容の表現の領域に「目的や場に応じて効果的に話したり朗読したりすること」、また、理解の領域に「朗読を通して文章の読解・鑑賞を深めること」と、二領域に共通の指導事項として「朗読」が示されている。

これは、表現と理解の接点に「朗読」があるからで、文章の意味内容的に、深く理解されたとき、その文章にふさわしい的確な、味わいのある「朗読」ができるからである。もし、豊かな「朗読」ができないとすれば、それは、文章の意味内容的理解もできていないことの一つの証明となるであろう。

文章の理解と朗読とは相互に依存しているものであるから、朗読することによって理解を深める・理解を深めるために朗読するなどの指導が極めて重要である。

1. 朗読を授業に取り入れる

国語の授業は「読むことに始まり、読むことに終わる」と言われる。この場合の「読む」は教材文の形態により、生徒の能力により、あるいは、読みの目的によって、黙読か、音読か、朗読かの違いはあっても、その文章の理解が的確で、能率的なものでなければならない。したがって、文章の理解を目指す国語の授業においては、「読み」は最も基本的基礎的な指導事項であると言ってよい。

しかし、高等学校の国語の授業において、「読み」については、黙読による個人読み・音読による指名読みのパターンを繰り返しているだけで、指導として具体的に取り入れられてはいないのではなかろうか。国語の授業は、文字面からの読解指導ばかりではないだろうか。

やはり、現代文においても、古文・漢文においても、詩歌においてはなおさら、音楽的な要素が、その作品をささえる主要素となっているものが大多数を占めている。これ等の作品は、声に出して肉声として体験することによってはじめて、深い理解ができ、鑑賞が広がっていくものである。したがって、音声的表現によるこ

とばの理解の方法として、「朗読」を授業に取り入れた指導が是非とも必要である。

2. 朗読指導の前提条件として

高校生にとって、朗読することは、かなり勇気を要することである。抵抗なく朗読ができるような教室の雰囲気づくりが不可欠の条件である。それが不十分な場合は、朗読の指導はもちろん、授業そのものに支障をきたしてしまう。

前提条件として考えられることは、

- (1) 朗読する生徒には、練習の時間を充分与えて自信を持たせておくこと。
- (2) 聞き手が、その朗読を聞いて、長所・短所を聞き分けたり、文章の理解・鑑賞を深めようとしたりする雰囲気を作っておくこと。
- (3) その文章内容を聞かせるために、朗読者が聞き手と正面から向かうように立たせること。
- (4) 指導者が「朗読」に深い関心を持ち、生徒が納得できるような具体的な指導ができ、また、範を示すことができること。

3. 朗読を取り入れた指導の具体例

教室における「朗読」を中心とした指導例を二、三挙げてみる。

- (1) 現代文(論説・説明文)においては
 - ① 生徒各自で1・2回黙読する。
 - ② 指名された者が音読する。
 - ③ 解説を聞く(発問に答へ・質問をする)
 - ④ 指名された者が朗読する。
 - ⑤ 鑑賞をする(感想・意見を話し合う)
 - ⑥ 書く(自分の意見・考えを整理し、まとめる)
 - ⑦ 各自静かに音読する。
- (2) 古文(散文)においては
 - ① 教師が範読する。
 - ② 生徒各自で何回も音読する。
 - ③ 指名された者が音読する。
 - ④ 解説を聞く(現代語訳をし、質問をし、発問に答える)
 - ⑤ 指名された者が朗読する。
 - ⑥ 鑑賞をする(感想・意見を話し合う)
 - ⑦ 書く(自分の意見・考えを整理し、まとめる)
 - ⑧ 各自静かに音読する。

(3) 漢文(散文)

- ① 教師が範読する。
 - ② 教師の範読につづけて、一斉音読する。
 - ③ 各自で音読を何回もする。
- 後は(2)の古文③~⑧を同じく行う。

おわりに

「朗読」の指導の重要性を基にして、それを

学習評価

「評価を生かした学習指導」

——二次方程式(中学数学)の解法を例として——

1. はじめに

今日、学校教育の中で、授業についていけない子どもの問題が上げられる。この学習の「おくれ」をなくすために、「どのように授業を設

取り入れた学習過程を示してきた。毎時間が同じパターンでの授業では単調になるし、教材文によって、その型は当然変えなければならない。要は、年間計画・月間計画等の中で「朗読指導」をはっきりと位置づけることである。

(所員 兵働 文雄)

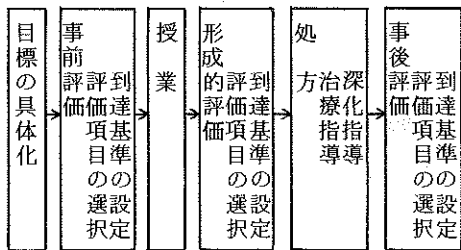
計し、指導のねらいを達成するか」が、私たち教師にとって、重要な課題だといえよう。

今回は、学習指導における到達度評価の生かし方について考えてみたい。

2. 到達度評価の実施手続き

学習指導において、その効果を上げ、意欲的に能率よく学習させるための到達度評価の手続きは、左の表のように進められよう。

そこで、この手続きを、中学数学3年の単元「二次方程式の解法」を例に考えてみたい。



(1) 目標の具体化 (表I) 目標分類表

目標 内容	A 認 知						B 情 意	
	知 識・理 解			技 能			1 関 心	2 意 欲 態 度
	用語 記号	原理・法則	概念	計算・操作	分 析	推 理		
二次方程式の解法	平 方 完 成	$x^2 = a$ ($a > 0$) $\rightarrow x = \pm\sqrt{a}$	平 方 完 成	・因数分解を利用して解く ・次の形の二次方程式を解く $ax^2 = b$ $(x-a)^2 = b$ ・平方完成の方法を用いて二次方程式を解く	・ $A \times B = 0$ ならば $A = 0$ かつ $B = 0$ ・ $A = 0$ かつ $B \neq 0$ ・ $A \neq 0$ かつ $B = 0$ に分類する ・ $x^2 = b$ の形に変換する		「正確な計算」への自己評価をする 「能率的な計算」への自己評価をする	・定型的な解法に関心を持つ ・規定型的な解法の美しさに一層数学の規則性を感じようとする ・二次方程式の解法を定着しようと努力する

(1) 目標の具体化(表I) 目標分類表

指導する単元の目標を、知識・理解・技能のみでなく情意面でも、具体的な目標(表I)にする。

(2) 事前評価と授業中の形成的評価の実践

この単元学習に入る前に、因数分解についての習得状況や興味関心についてのレディネスを

(表II) 授業設計表

学 習 活 動	学習内容・教具 資 料	目 標 行 動	評 価
因数分解を利用して、二次方程式を解く 形成的評価 I A 補充学習 B 深化学習 $ax^2 = b, (x-a)^2 = b$ の形の方程式を解く 平方完成を用いて $x^2 + bx + c = 0$ $ax^2 + bx + c = 0$	・二次方程式を解く ・ $A \times B = 0$ ならば $A = 0$ かつ $B = 0$ $A = 0$ かつ $B \neq 0$ $A \neq 0$ かつ $B = 0$ ・ $O \cdot H \cdot P$ T.P 形成的テスト ・学習プリント ・ $O \cdot H \cdot P$ T. P(補充) ・ $4x^2 - 7 = 0$ $(x-3)^2 = 49$ など ・ $x^2 - 6x - 40 = 0$ $2x^2 - 4x + 1 = 0$ など ・学習プリント ・ $O \cdot H \cdot P$ ・T. P(補説)	変数 x の変域による解の個数を指摘できる 一次方程式から二次方程式を類推して、用語について言うことができる 「かつ」「または」の用語の意味に基づいて、 $A \times B = 0$ を分類できる 因数分解を利用して、二次方程式の解を求めることができる 次の形の二次方程式から、解を確実に計算することができる $x^2 = b$ $ax^2 = b$ $(x-a)^2 = b$ $(x-a)^2 = b$ を $X^2 = b$ に変換して計算することができる 平方完成の方法を確実に言える	・発言チェック ・ノートチェック ◀形成テスト(5問) ・共通因数でくくる ・平方公式の利用 ・和と差の積 ・ $(a+b) \times (a+c)$ の形 ※全解者のみ深化学習 ・ノートチェック ・発言チェック ◀形成テスト(2問) ・ $x^2 - 8x - 2 = 0$ ・ $3x^2 - 5x + 1 = 0$ ※両解者が40人以下ならば一斉に補説・40人を越えた場合は個人的に補充
形成的評価 II 補説		◯次の二次方程式を因数分解を用いて解け。 1. $x^2 - 3x = 0$ 2. $x^2 + 10x + 25 = 0$ 3. $x^2 - 18x + 81 = 0$ 4. $x^2 - 49 = 0$ 5. $x^2 - 3x - 10 = 0$	
補充学習 深化学習		1. $(x-3)(x+8) = 0$ 4. $x^2 - 14x = -49$ 2. $x^2 = -5x$ 5. $x^2 - 16 = 0$ 3. $x^2 + 16 = -8x$ 6. $x^2 - 11x + 18 = 0$	
補説		◯次の二次方程式を平方完成の形を用いて解いてみよ。 1. $x^2 - 8x - 2 = 0$ 2. $3x^2 + 5x + 1 = 0$	
補説		1. $x^2 + bx = c$ の両辺に $(\frac{b}{2})^2$ を加える (例) $x^2 - 6x = 7$ を用いる 2. $x^2 + \frac{b}{a}x = -\frac{c}{a}$ の両辺に $(\frac{b}{2a})^2$ を加える (例) $2x^2 + 3x - 1 = 0$ を用いる	

評価(事前評価)し、学校教育の全体的なカリキュラムも考慮して授業の設計(表II)をする。つぎに、1時間1時間の授業の中で、問答、学習作業の観察、アンサーチェッカー、小テストなどで、形成的評価を行なう。

このことが、指導の基盤となり一番重要なものである。子どもたちの目標に対する到達状況を知ることによって、その後の指導計画の修正、並びに未到達者の補充指導・深化学習に役立つと考えられる。

3. おわりに

毎時間の学習指導・学習活動の中で、子どもがどれくらい目標に到達できたかを具体的に知ることによって、後の学習指導に生かすようにしなければ意味がない。このことを常に頭において、より効果的な指導をしたいものである。

(所員 井樋 章夫)

教育相談

意欲的学習をささえる親や教師のはたらきかけ

学業不振ということで当教育センターに来所した中学生が「父や母は勉強、勉強という。勉強していても見せかけだと批難する。一人では勉強しきらんと行ってつきっきりで勉強させる。もう家に帰りたくない」と訴えていた。

また、小学4年生の母親は「勉強しなさいと言うと、しぶしぶ部屋に入って行くんですよ/気になって見に行くけど漢字を書いているけど、それが乱雑ですね/消して書き直させていたんですよ/それが、今ではお母さんがそばにいるなら絶対書かんと言うんですよ/」となげいておられた。カウンセラーが「消されたお子さんはどんな気持ちでしょうね」と言うと、お母さんは「きれいに書かせたいですものね」と強い口調で言われる。カウンセラーが「乱雑でも書いたことを認めてあげたら」と言うと、お母さんは「でも堪えきらんですよもんね」とくやしそうに言うておられた。

親が子どもに何とか勉強させたいという気持ちは良くわかるが、「おまえの勉強は見せかけだ」と言われた子どもの気持を考えると、「どうしてまかせてくれないんだらう」、「どうして勉強を認めてくれないんだらう」などの思いで一杯ではなからうか、そんな不安定な気持ちが「家に帰りたくない」という言葉で表現されているように思える。乱雑に書いた漢字を消して書き直された子どもは、いらだちながら書いた漢字を消されふんまんやる方なく、認めてもらえないくやしさと怒りのため「お母さんがおるなら絶対書かん」と反抗的態度に出たものと思われる。

つきそわれたり、書き直させられたりなど、受け身で学習している間は生き生きとした学習にはなりえない。学習の主体は子どもである。子どもが「学びたい」、そして「学ぶ」という状態になり、自主的に動いてこそ充実した学習になる。親の思い通りに勉強させよう、思うよ

うにきれいな漢字を書かせようというのは親の価値感を押しつけることであり、子どもの学習意欲とはならないばかりか、子どもは反抗的になったり、無気力になったりするだけである。子どもが学習しようと意欲を示し、実際に行動するには、認めてあげたり、ほめてあげたりすることで楽しい感情と学習が結びつくようになることが大切である。

教師と子どもとの関係においても同じだと言える。表面の行動だけにとらわれず、子どものことを考え、子どもの感情を大切に、子どもの感覚や考え方、好奇心など子どもの動きに常に新鮮な驚きを感じ、子どもの力を大切にしようとする教師のもとでは、子どもたちは生き生きと活動し意欲的な学習ができる。

ある幼稚園の男の子が海に行ったときの絵を書きましようということで、洋紙の上半分は水色、下半分は桃色で塗り、それを手でぐちゃぐちゃにしてまたていねいに開いた。これを見た先生は「どうしてぐちゃぐちゃにしたの」とやさしく問いかけられた。男の子は「……なみ……」と答えた。男の子は波のみだれや砂の模様をぐちゃぐちゃにすることによって表現したかったのであろう。

親や教師は、子どもの行動(学習)を一方向的に責めたり、変えようとしてしないで、子どもの行動や考えかたを理解するとともに、子どもの心の動きを敏感に感じとり、その内面へはたらきかけることが大切である。親や教師がこのようなかかわり方をすると、子どもは自分に関心をもってもらえた、認めてもらえたと感じる。この認めてもらえたという気持ちが次の学習の意欲につながるのである。

(所員 川崎紀久雄)